



青木家住宅

梅田町一丁目、桐生川に沿って広大な敷地の中に建つ青木家住宅は、近代的マニファクチュアの先駆とされる「成愛社」ゆかりの建物である。

成愛社は、明治13年(1880)設立認可を得て、明治14年(1881)12月に上久方村(梅田町)の青木保蔵氏、青木熊太郎氏ら同族6氏が成愛合資会社を創立、工場の経営に乗り出した。明治維新以降、中国から「南京縐子」の流入が多く、これに対抗することが大きな目的であった。一方、同族組織だったため、社則を取り決め、意志統一と品質維持、精神修養のため全社員ロシア正教の信者になった。成愛社が開発した縐子は高級な絹綿交縐子で、「観光縐子」と呼ばれた。縐子とは婦人の帯地、半襟、袖口、洋服の裏地などに使用された織物で主力は黒地であった。明治18年(1885)政府の援助を受け、イギリス製艶出ロール機、ボイラーなどを輸入した。その一方で、輸出向け羽二重の製造にも取り組み、保蔵氏の邸宅敷地を拡張して工場2棟も増設した。

桐生の産業史に先駆的な足跡を残した成愛社は、明治24年(1891)10年満期で、翌年解散。保蔵氏は羽二重、熊太郎氏は縐子織物とそれぞれ単独経営となった。

青木家住宅の家督を継いだのが青木専治氏である。基本的に日本家屋であるが、北側に洋室がある和洋折衷住宅で、昭和初期の増築と思われる。専治氏は、京都高等工藝学校を卒業後、実業界に身を投じ、欧州各国を視察して帰朝後、両毛整織に入社、専務取締役となり手腕をふるったが軍事供出により操業停止。工場は第二精工舎に譲渡した。戦後、建物は取り壊され、その痕跡は残っていないが、大谷石造りだった両毛製織工場の一部が堀祐織物の敷地に移築したのが、ノコギリ屋根工場「美容室Ash」であるという事実が明らかになりつつある。

青木家住宅は、桐生のマニファクチュアの発祥と明治から連なる織物経営者の暮らしを伝える由緒のある建物であり、成愛社ゆかりの桐生織塾と並んで後世に伝えていくべき風景と言える。

所在地 桐生市梅田町1-757
所有者 青木 りさ